

# 特別支援学校における教員の専門性の探索的検討

## －専門性の向上のための一考察－

学籍番号 229106  
氏名 河村真司  
主指導教員 水野治久  
副指導教員 餅木哲郎

### 1. 問題と目的

特別支援学校である実習校では、教員の専門性の向上を目的に様々な研修や取り組みを行っているが、その専門性について教員全体で共通理解ができているわけではない。またA自治体も教員の育成指標を提示しているが、現場では活かさきれておらず計画的に教員が育むべき専門性が明らかになっていない状況であった。そこで、本実践研究の目的を、特別支援学校における教員に必要な専門性をA自治体内の特別支援学校現職教員を対象とした調査や研修にて検討し、それらの専門性について現職教員の概念どのように構成されているかを明らかにすることとする。

### 2. 実践研究の内容

#### 実践1 実習校の教員に高めたい力の抽出

【目的】個別の教育支援計画の目標が正しく記載されているかを確認すること。またそのプロセスを通して、実習校の教員に必要な力量を抽出すること。

【方法】研修支援部としてあらかじめ研修やマニュアルなどで提示した「子どもの実態を把握していること」「子どもの障がいの特性を理解していること」「障がい特性に対応するための手立てを知っていること」「目標を具体的に示すこと」の項目が実習校の教員が策定する個支計に記載されているかを確認する。そのプロセスを通して、実習校の教員に必要な力量を抽出する。

【結果】本実践においては、実習校の教員が策定する個支計146名分の目標から計81か所のチェックを確認することができた。そこから24つのチェックを付けた理由を得ることができた。その内容をKJ法に準拠してカテゴリ分類したところ6個の大カテゴリに分類された。6個の大カテゴリにはそれぞれ「ア:子どもに必要な技能を身につけさせられる力」「イ:子どもの能力を見極める力」「ウ:子どもの行動の理由を把握する力」「エ:領域に応じた目標を立てる力」「オ:領域に応じた目標を立てる力」「カ:他者に活動内容を言語化して伝える力」といった分類名が付された。

#### 研究1 実習校である特別支援学校の教員に必要とされる専門性の検討

【目的】報告者の実習校である特別支援学校において教員が求められる専門性を具体的な行動に置き換えて挙げることを目的とする。

【方法】特別支援学校の教員としての専門性について言及されている文献の中から記述されていた特別支援学校の教員に必要な専門性を抽出した66項目と報告者が実践1で抽出した実習校

の教員の高めたい力41項目を対象とした。これらの内容をKJ法に準拠してカテゴリ分類した。  
 【結果】カテゴリ分類したところ、6個の大カテゴリに分類された。6個の大カテゴリにはそれぞれ「アセスメント」、「子どもの特性理解」、「授業力」、「特別支援教育における基礎的な知識」、「個別のニーズに対応した支援」、「他者との連携」といった分類名が付された。また2項目はカテゴリに属さなかった。また、KJ法を用いて、専門性の項目と実践1との重なりが多い箇所を、48項目のより具体的な行動ベースに書き換えることができた。

**研究2 特別支援学校教員に求められる専門性に関する調査**

- 【目的】特別支援学校教員に必要とされている専門性や専門性の概念を抽出すること。
- 【方法】研究2で作成された特別支援学校の教員に必要とされる専門性の尺度を用いて、質問紙調査を行った。質問紙調査はグーグルフォームにて行われた。
- 【結果】特別支援学校の教員の専門性尺度項目は、最小二乗法及び、プロマックス回転で因子分析を実施した。因子負荷量の値及び因子構造を検討し、最終的に表1のとおり、3因子解が最適と判断された。

表1 特別支援学校の教員に必要とされる専門性尺度の因子分析結果

項目	Factor1 アセスメント	Factor2 他者との 連携	Factor3 授業力	共通性
	$\alpha = .832$	$\alpha = .833$	$\alpha = .870$	
1. 日ごろの生徒の言動の変化に気付いている。	.912	-.110	-.098	.671
2. 日ごろの生徒の行動の変化に気付いている。	.878	-.151	-.021	.639
3. 生徒が考えていることを理解しようとしている。	.592	-.061	-.017	.308
5. 生徒の現時点での能力を把握している。	.578	.193	.023	.507
7. 生徒のわずかな成長に気付いて言語化している。	.444	.124	.010	.277
8. 生徒の発達段階に合わせて生徒指導の方法を変えている。	.439	-.011	.118	.251
6. 生徒の障害特性を把握している。	.439	.184	.199	.470
37. 生徒の問題解決のために外部機関を活用することができる。	.074	.801	-.039	.680
28. 生徒が就労するために必要な力を把握している。	-.181	.763	-.080	.433
38. 外部機関に援助を要請することができる。	.117	.725	.021	.647
29. 生徒が自立に向けて必要な力を言語化して説明できる。	-.164	.635	.104	.375
36. 生徒の問題解決に向けて必要な関係機関を把握している。	.177	.616	.032	.551
22. 生徒の将来を見据えて指導している。	.007	.484	-.090	.205
13. 個別の教育支援計画目標を達成するための授業を展開している。	.025	-.172	.940	.782
14. 授業を実施する際生徒一人一人の個別の教育支援計画の目標を意識している。	-.038	.054	.861	.754
12. 一人一人に個別の目標を設定して授業を行っている。	.002	.059	.737	.589

**3. 総合考察**

本実践研究では、現職特別支援学校教員に質問紙調査を実施した。その結果を因子分析し、専門性の概念を抽出した。その結果3因子が抽出された。その因子は、この研究で一貫して重要視されていた「アセスメント」、多くの関係者と連携しながら教育活動を進める特別支援学校だからこそその「他者との連携」、そして教員として基本となる「授業力」という結果になった。また、重回帰分析の結果から、日ごろの特別支援学校教員の生徒に対する「アセスメント」は特別支援学校の教員の仕事に対する「やりがい」に有意な正の影響を与えていた。このことから「アセスメント」に関する能力が特別支援学校の教員が重要視すべき専門性である可能性があるが、それを特別支援学校の教員に必要な専門性と言い切るには不十分であると考え。それを明らかにすることについては今後の課題である。